

主論文の要約

論文題目：学生支援におけるピア・サポートの再考
—支援の対等性と相互性に着目して—
氏名：植田峰悠

論文内容の要約

本論文では、大学において学生支援の基盤の一つとしての役割が期待されている学生相談機関の行う活動に着目し、「対等性」と「相互性」を有する支援のあり方としてピア・サポートを再定義した上で、学生支援にピア・サポートの視点を取り入れることの意義と、ピア・サポートの視点を取り入れた新たな学生支援のあり方について検討を行った。

まず、第1章においては学生相談活動の現状と課題について整理し、学生支援におけるピア・サポートにはどのようなものがあるか、その現状と課題についても整理を行った。その上で、第2章では大学生によるピア・サポート、第3章では支援者である学生相談カウンセラーによるピア・サポートをとりあげ、第4章では個別の学生相談活動におけるピア・サポートのあり方と学生相談カウンセラーの役割について検討を行った。その結果を踏まえ、第5章において総合考察を行い、大学におけるピア・サポートの充実がどのような点において必要とされているのか、どうすれば充実できるのかについて論じた上で、ピア・サポートの視点を取り入れた新しい学生支援の形について考察と提言を行った。

第1章 学生支援におけるピア・サポートの現状と課題

第1章では、まず学生相談が大学という場においてどのように発展してきたかについて整理した上で、2007年に日本学生支援機構より報告された「大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—」における「学生相談の3階層モデル」を用いて学生支援活動の現状と課題について考察を行った。

その結果を受け、近年様々な対人援助活動の領域において注目されつつある「ピア・サポート」の視点から現状の学生支援を振り返り、本研究ではピ

ア・サポートを「相互性と対等性を有する支援のあり方」として再定義した。対等性とは単に社会的な立場が同じことを指すものではなく、同じ目的に向かって立場の上下や強弱の差がない者同士で相互にかかわりあいながら行われる支援のあり方を指す。そのため、学生同士や学生相談カウンセラー同士、あるいは教職員と学生相談カウンセラーといった、様々な立場による活動が想定され、大学生によるピア・サポート活動もその一形態とみなせることから、「学生ピア・サポート活動」として両者が弁別可能となるよう表記した。再定義されたピア・サポートの概念に基づいて、学生支援におけるピア・サポートを再考するという本論文全体の目的が論じられた。

第2章 大学生による学生ピア・サポート活動の運営における課題の検討

第2章では学生ピア・サポート活動を調査対象とし、学生相談機関が学生ピア・サポート活動を運営する上で求められる課題について検討を行った。

調査対象としては、学生ピア・サポート活動を継続していく上で不可欠な要素となる、大学生ピア・サポーター（以下ピア・サポーター）の活動継続にかかわる要因をとりあげた。A大学のピアサポートルームに調査前年度より所属を継続しているピア・サポーター延べ99名を対象とし、現在の学生ピア・サポート活動の状況と課題について質問紙と半構造化面接を用いて尋ねた個別面談記録、及びメールを用いて依頼したウェブアンケート結果を基に分析を行った。

その結果、ピア・サポーターの活動継続に影響すると考えられる要因として「ピアサポーターとしての成長の実感」「他者を実際に支援する機会」の2つが見いだされ、学生ピア・サポート活動が学生自身にとっての成長促進的役割を担っていることが示された。しかし、一方で先行研究でも指摘されている大学全体への波及の難しさも改めて浮き彫りとなった。

第3章 学生相談カウンセラーに必要なピア・サポートのあり方に関する検討

第3章では、学生相談活動の担い手である学生相談カウンセラー自身にとってのピア・サポートのあり方について検討を行った。

方法としては、大学の学生相談機関にカウンセラーとして5年以上勤務した経験を持つ者5名を対象とし、グループディスカッション形式による調査を行った。最初に、カウンセラーの出会う困難状況にはどのようなものが存在するかについて全員が思いつく限り挙げ、「学生相談カウンセラーが出会う困難状況」項目としてKJ法を用いて整理した。その後、困難状況の各項目におかれたカウンセラーに対し、どのようなサポートが考えられるかに

についても洗いだし、その結果について KJ 法を用いて「学生相談カウンセラーへのサポート」項目として整理し、考察を行った。

学生相談カウンセラーの会える困難状況について整理した結果、学生相談活動は職務環境という土台の元、学生相談に期待される役割という軸を持ち、それらを元に組織的な連携・協働を展開していくという学生相談活動のモデルが示された。また、学生相談カウンセラーへのサポートとしては、組織の中で得られるサポートの他に、一個人として受けるサポートや、必要な情報を得るといったサポートが存在し、それら全てにまたがる「カウンセラー同士のネットワーク」というピア・サポートの在り様が示された。

第 4 章 個別の学生相談活動をピア・サポートの視点から捉え直すための事例検討

第 4 章では、学生相談カウンセラーによる学生との個別学生相談事例をとりあげ、カウンセラーと学生とのピア・サポートという視点から日常の学生相談活動の展開について考察した。

その結果、学生とカウンセラーとが互いの意見を率直に語り合える関係へと変化していくなかで、学生自身に「対等な仲間」を求める気持ちが語られるようになり、相談室の外でのピア・サポートへの希求へとつながっていった過程が示された。学生相談という個別相談の場において、学生とカウンセラーとが同じ話題について対等に語り合う体験が積み重ねられていったことで、学生生活においても対等な立場で支え合える関係への希求が生じていったことが考察され、個別の学生相談活動が学生にとってのピア・サポート関係のモデルとして機能してきたことが示された。

第 5 章 総合考察

第 5 章では、これまでの研究をふまえてピア・サポートの視点から学生支援を捉え直すことの意義、充実方策について検討し、ピア・サポートの視点を取り入れた新しい学生支援の形についても提言と考察を行った。

学生支援は大学というコミュニティ全体が担う活動であり、大学人一人ひとりがコミュニティにおいて、「学生支援」というミッションのもと日常的に互いを対等な存在として尊重し合い、支え・支えられる体験を繰り返してゆく中で、学生へと支援が還元され、そのプロセス全体が学生の成長を促す教育活動としての意義を有していることが論じられた。一人ひとりの大学人が対等な存在として互いを尊重しながら相互的にかかわりあう大学コミュニティを築く“学生支援のピア・サポートモデル”の必要性が提起され、今後の本モデルの精緻化と活用に向けての展望が論じられた。